
アルト

若林夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルト

【Nコード】

N 8 1 3 9 F

【作者名】

若林夏樹

【あらすじ】

現在人気急上昇中のグループ『アルト』。彼らは未だに顔を出していないという、とても謎に包まれたグループだった。そのボーカルの隼人は、アルトとしての活動を続けるために、好きな人にも自分の正体を明かしていなかった。そんなある日、アルトのメジャーデビューが決まり……

第1回 謎のグループ

「見てー！アルトだよ！」

今人気急上昇中のバンド。その名もアルト。インディーズでありながらもその実力はマスコミにも高く評価され、男女問わず人気のグループだ。

しかし、彼らについて知っていることは少ない。自称シャイボーイの彼らはメディアにも雑誌にもほとんど出ない。たまに雑誌に載るときがあっても、決して自分たちの写真は撮らせなかった。わかっていることは、男性4人組だということだけ。

ライブもやっていない。昔、まだ無名だった頃に何度かライブハウスでやらせてもらっているが、最近はそれすらもない。

謎に包まれたグループ、それがアルトだった。

そのアルトのボーカルが、本編の主人公、西村隼人^{ハヤト}。

「アルトが雑誌に載ってるなんて珍しいよねー」

「だねー。あたし、マジで好きなんだー。ってか、メンバーの顔が見たいし」

コンビニで立ち読みをしている女子高生2人組みの後ろをコソコソと通っていく。

後ろを通ったどこにでもいそうな男子が、まさかアルトのボーカルだとは彼女たちは気づいていない。

アルトが顔を出さないのは、単純にアルトのリーダーが以前「俺、写真写りが悪いんだよね」と言っていたことに由来する。別に音楽に顔は関係ないと言っているわけではなかった。

だから、隼人も学校ではただの高校生だ。身内や昔からつきあい

のある幼なじみを除いて、彼がそのメンバーであることを知る人はいない。

決してバラしてはいけない。これがアルトのルールだ。例えば好きな女の子にさえも。

「ごめん！待った？」

隼人が待ち合わせ場所に少し遅刻して到着すると、すでに相手はぶんぶんとう首を振った。

「全然待つてないよ。大丈夫」

同じクラスの女の子、佐山友紀は少し頬を赤らめて答える。

今日待ち合わせたのは、デートとかではない。他にも何人かのクラスメートが来る予定だ。

「あれ・・・英ちゃんたちまだ来てないの？」

「さっき来たよ。ほら、コンビニの中にいる・・・」

そこでようやく目の前にあったコンビニのレジに並んでいる3人の待ち合わせ相手を見つけた。

5人で行こうとしている所は、つい最近オープンしたばかりのショッピングセンターだった。東京にしては田舎であるここに、近代的な建物ができたのだ。

「あの店なんだろ・・・」

「よしっ！偵察に行つて来い！隼人」

「はあ！？なんで俺が？」

田舎者の会話を振られた隼人は驚いて顔を上げる。

そして、試しに店を見てきて、それが輸入商品を扱う雑貨屋だと知って戻ってくると、そこにいたはずの友達がなくなっていた。友紀を除いて。

「え！？あいつらは！？」

「向こうに本屋があるからそっち見に行くって」

「なんだよ……あいつらかなり白状だし」

そのとき、友紀がクスクスと笑った。

「西村君って本当にみんなに好かれてるよね。いつもクラスの中にいる」

「そんなことないよ。だったらこの仕打ちひどくない？」

げんなりとして隼人が言い放つ。

でも、そのおかげでこうして友紀と2人きりになれたことは感謝している。

隼人がなんとなく落ち着かなくなったのは、みんなでCDを見ているときだった。

「あ……この曲アルトだ」

友紀が上を見上げて言う。まさか彼女の口からその言葉が出ると思わなくて、隼人は驚いてしまった。

「アルトってさ、なんで顔出さないのかな」

ショートカットの女の子、天野美幸が疑問を口にする。隼人は何も答えずに視線をそらしていた。

「いざ顔出したとき、全然たいしたことない顔だったりしてな」と、松田勇太。

「いや、まあそんなことないんじゃない？」と、高橋英二。ただ1人隼人の正体を知っている幼なじみだ。

「どんな人たちでも、友紀は大好きなんだよねー？」

美幸の言葉に、友紀はすごく嬉しそうに頷いた。

「私・・・アルト大好きなんだ！」

「えっ・・・・・・・・！」

その隼人の声に4人が一斉にこっちを向いてきた。英二だけが眉間にしわを寄せている。

一瞬言ってもいいんじゃないかと思ってしまった。もし言ったら、友紀は自分を好きになってくれるかも――と。

しかし、すぐに英二に強制連行されてしまった。

「お前、まさか佐山さんに言ったら好印象だとか思ってたんじゃないかなーだろうな？」

「え、ちよっと思っただけ」

バカ正直に言つと、ぐえっと思二に首を絞められてしまった。

「アホか！後のことをもって考えろって」

そうだ。言ったらルール違反になる。好きな女の子にでさえも。

第1回 謎のグループ（後書き）

はじめまして。こんにちは。

初の音楽モノですが、楽しんで書いていきたいと思っています。
いきなり登場人物がたくさん出てきました；；

友紀と英二だけなんとなく覚えてくださると嬉しいです！

次回はアルトの他のメンバーが登場します。

第2回 メンバー（前書き）

今回はアルトの他のメンバーが登場します。

第2回 メンバー

夕方を過ぎた頃、いつものスタジオにいつもの面々が現れる。

「よお隼人。歌詞書いてきたか？」

開口一番のその言葉は、隼人の痛いところをついてくる。

「うう・・・いきなりそれですか・・・和馬さん^{カズマ}」

アルトのメンバーの1人、ベース担当の矢口和馬、21歳。大学3年生だ。

「当たり前だろー。次こそは歌詞書くって約束しただろ？」

「書きましたけど・・・絶対に笑わないって約束してくださいよ」

そう言って、隼人は授業中に書いたルーズリーフを1枚取り出した。

数分後、スタジオが笑いに包まれる。

「だはははは！！！！なんつーか・・・すっげー純情！！」

「笑わないって約束したじゃないですか！」

慌てて隼人がその歌詞の紙を取り上げようとすると、それを和馬が阻止する。

「待てって。あいつらにも見せよーぜ。もうすぐ来ると思うから」

バッドタイミングに、ちょうどそのとき、アルトの他のメンバーが到着してしまった。

「今日は早いな」

リーダーの相沢透也^{トウヤ}。ドラム担当の24歳。
その後ろには、21歳、ギター担当の直人^{ナオト}も一緒に現れた。

「リーダー！直人！見て見て！隼人の書いた歌詞」

和馬がひょいっと紙を2人に渡してしまう。取りかえそこなった隼人はそのまま和馬がいた場所にどさつと倒れこむ。さらに、その上から和馬に押さえつけられてしまった。

「だーもー！放せよー！」

「とにかく早く見てくれ！」

和馬から受け取った歌詞を透也と直人が一緒になって見る。

自分の書いた歌詞が見られるということで、隼人はすごく恥ずかしくなってしまった。

数分後、スタジオが感動の涙に包まれた。

「いい・・・いいよこれ！次の曲にしよう」

「いいんですか・・・？こんな変な歌詞で」

心底不思議に思っただけは隼人は訊ねる。なぜかリーダーの隣にいた直人は涙ぐんでいる。

「やつべえ・・・俺、昔の彼女思い出しちゃった」

直人の彼女に対しては触れてはいけないという暗黙のルールがあるため、それ以上つっこむ人は誰もいなかった。

とにかく、隼人がぼけつとしている間に物事はあれよあれよと進んでいった。

曲作りに関して、先に歌詞ができることもあれば、曲が先のこともある。とにかく思いついたら試してみることが大事なのだ。

ギターの直人によって、隼人のつたない歌詞がマジでこれは最高だと思える曲になった。それをメンバーによって編曲し、1ヵ月後には完璧な曲に仕上がっていた。

「ちょっと話があるんだ」
リーダーからそう言われたとき、なぜかメンバー一同緊張してしまった。

「あのリーダーが話があるなんて言っただけで呼び出すんだぜ？絶対なんかあるって。解散宣言でもされるんかも」

スタジオに一緒に向かっていた和馬が縁起でもないことを言う。しかし、それもありうるかもしれないと隼人は思った。

「解散はしたくねえけど、万が一そうになったらせめて最後に正体明かして潔く散りたいな」

「それわかります。俺もアルトのメンバーだって言いたい人がいるんだ」

隼人は友紀のことを考えながら何気なく言ったが、和馬によってそれをつっこまれてしまうことになる。

「なんだそれ。お前、好きな女でもいんのか？」

和馬にだけはなんとなく知られたくなかったが、ここまで言ってしまったら仕方がない。隼人はこくと頷いた。

「俺の好きな人、アルトの大ファンなんです」

「うわっ！俺だったら絶対言ってる！」

よく我慢できるなーと和馬がぼやく。

と、そのときだ。目の前を自転車に乗った女の子が信号待ちをしているのが見えた。

「あ……………」

佐山友紀だ。それに気づいた瞬間、彼女がこっちを向いてしまった。

「あれ……？西村君？」

一瞬、友紀に今の会話が聞こえてしまったんじゃないかとひやひやしたが、そんなことはないらしい。

「すげー偶然。まだ帰ってなかったんだ」

時刻は午後8時を過ぎている。友紀は制服だった。

「おばあちゃんちに行ってたの。西村君は？」

「えっ……と俺は……」

思わず口ごもったが、別にスタジオに行くなんて言わなければ絶対にバレることはない。

「ちよつと友達と遊んでたんだよ」

幸い、彼女が隼人の言葉を疑うことはなかった。

アルトのメンバーだと言ってしまいたい気持ちはある。

だけど、バラさないように意識している時点で、やっぱり自分はアルトが大好きなんだと気づく。

だから、お願いだから解散だけはやめてください、リーダー。

「ライブをしよう」

メンバーの予想に反して、リーダーはあっさりとそう言い放った。

第2回 メンバー（後書き）

余談ですが…

アルトという名前は、ソプラノ・アルトからではなく、
イタリア語からこじつけで考えたんですけど…
そのうちリーダーが明かしてくれるでしょう。

第3回 仮装ライブ（前書き）

新キャラ登場です

第3回 仮装ライブ

「まあライブつつつても、そんな大掛かりなもんじゃないけどな。小さなライブハウスのちよつとしたイベントで『仮装ライブ』とかいうのがあつてさ、それにちよつくら出てみんかーって話があつた」はにかんだように笑いながら、リーダーの透也は説明する。

その笑い方は隼人から見れば大人っぽかったが、逆に本人はフケて見られているとシヨックを受けたらしい。

「ライブしてー!!」

まず最初に乗気になったのは和馬だった。

「仮装ライブっていうんだからなんか仮装するんだろ？それって自分たちがアルトだつて名乗んの？」

的確な質問を直人がする。

「名乗ろう。無名のグループが多いイベントだからそんなに注目されてないと思うし」

3人の会話を聞きながら、隼人はテンションがぐるぐる回り始めるのを感じた。

ライブ・・・？また2年前のようなことができる・・・？

「隼人はどう思う？」

リーダーに唐突に話を振られ、隼人はどきつとしてしまった。

「なんていっても、1番注目されるのはボーカルのお前だからな」

「出たい・・・めっちゃ出たいっす!!」

腹の底から力を込めて隼人は叫んだ。

そして、ライブ当日の学校で、隼人は幼なじみの英二にだけライブをやることを話した。

「そんなことやってバレたりしないのかよ」

「大丈夫でしょ。リーダーはあんまり注目されてないイベントだって言っし」

「そうかい？」

元々隼人がアルトに入ったきっかけは英二にライブハウスに連れてってもらったことから始まる。

大して興味のなかったグループの前座として歌っていたのがアルトだったのだ。

その当時、ボーカルには別の男が担っていたが、ちょうど隼人がライブを見に行ったその日に脱退することになっていて、その後、隼人が入って現在の形になっている。

「もしなんかあったら頼むよ」

「何をだよ」

英二がうんざりしたように訊ね返す。

「だって英ちゃんにしか頼める人いないしさ、めんどくならないように」

「わかったわかった。なんかあったらフォローしとくよ」

隼人は目の前の幼なじみに心の底から感謝した。

一体何に仮装するとかと思いきや、リーダーが用意したのは、なんと覆面レスラーのような衣装だった。

1番最後にそのライブハウスに到着した隼人は開口一番に、
「これ着るんですか？」

と訊いてしまった。すでに他のメンバーは覆面レスラーになりき

っている。

「いや、他の奴ら見てみたけどもつとすげーのとかいたよ。白鳥のカッコしてる奴見た瞬間、レスラーが輝いて見えた」

和馬が真剣な顔で答える。覆面のせいで声がくぐもって聞こえた。覆面レスラーと言っても、ちゃんと服を着ている。確かに白鳥よりはいいかもしれない。

そう思っ、隼人はトイレでその格好に着替えることにした。

「ちよつとー!!」

トイレの個室に向かうとしたとき、なぜかそこで聞こえるはずのない声が聞こえてきた。男子トイレのはずなのに女の子がいる――

「へっ変態・・・!」

「どつちが変態よ!ここは女子トイレなんだから!」

その女の子の言葉でようやく周りの状態が目に入った。今思えばなんで気づかなかったんだろう。男子用の便器がないことに。

「うわっ・・・やつべ・・・!」

慌てて出て行こうとすると、その女の子とぶつかってしまった。それだけ慌てていたらしい。

しかも、漫画みたいな展開なことに、隼人は彼女を壁に押し倒してしまった。

「変態な上に、今度は襲う気?」

静かにそう言われて焦ったが、隼人は別のあることが気になり始めた。

「いやっ・・・あの、えっ・・・っていうか、佐山さん?・・・
なわけないよね。髪もつと長いし」

そこまで言っはつとした。

「ごめんなさいー!!」
もう二度と会いたくないと心からそう思って、ダッシュで逃げることに成功した。

それにしても似てたな・・・同じクラスの佐山友紀に・・・

仮装ライブは無事にスタートした。10組ほどのグループが仮装して出るらしく、最初は例の白鳥だった。インパクトは十分で、2組目の侍たちが霞んで見えた。

「俺たちは8組目だから」

リーダーの言葉にメンバーそれぞれが頷く。

今回歌う曲は、アルトとしてまだCDを出していないものばかりだった。しかし、4曲予定している中、1曲だけ今度出す予定の新曲『花びら』を入れている。

「やばい・・・緊張してきたー」

「出た。直人のシャイボーイが」

和馬がそれをからかうが、それに答える余裕もないらしい。

時間は刻々と過ぎていく。もうすぐ出番だ。

「よっしゃ。行くぞ」

リーダーの一声で、ようやく覆面レスラーが登場した。会場が盛り上がる中、その正体不明のボーカルがマイクを手にする。

「はじめまして！アルトです！」

第4回 ライブ終了後

「はじめまして！アルトです！」

その声に盛り上がっていた会場が少しだけざわめきに変わる。

何人かが客席からいろいろな質問が飛び交ってきたが、それに答えることなく隼人は喋り続けた。

「それじゃあ、まず1曲目！聞いてください。『Boys』」

隼人の言葉が終わると同時に、直人のギターがジャンと音を立てて鳴り響く。

最初は半信半疑だった観客も徐々にヒートアップしてきて、初めて聞くだろうその曲に合わせてジャンプして盛り上がる。

「行くぜー！！」

隼人のテンションも普段と比べ物にならないほどハイだった。

懐かしー・・・このカンジ。やっぱライブは最高だ・・・歌っている最中はそれ以外のことを考えられなかった。とにかく30分という短い時間を余すことなく使い切った。

「サイッコー！！」

ライブ後の打ち上げでも。まだ4人のテンションは上がりっぱなしだった。

「やっぱライブはいいよな！またやろうぜ、リーダー！」と、和馬。「そうだな。考えとくよ」

リーダーもいつになくハイテンションだ。そういうとき、たいたい口元が緩むんだと昔直人に教えてもらったことがある。

隼人もまだ心臓の鼓動を抑えることができなかった。

1曲目の『Boys』から始まり、最後の曲『花びら』まで何かの世界に浸り続けていた。

打ち上げの最後に、リーダーが締めくくった。

「とにかく今日はおつかれ！またこうやってライブできたら絶対やるうー！」

翌朝、昨日のテンションがようやく下がり、下がりすぎて隼人の頭はぼーっとしてしまった。

やべー・・・今日授業起きてられるかなあ・・・

朝ごはんをもそもそと食べながら、何気なくいつも見ている朝のニュースを見る。

——信じられないものを見た。

『では、芸能スクープのコーナーです。メンバーの顔が明らかになっていないグループ「アルト」が初めて公の場に姿を現しました！』
ぶっつっつ！！！！

思わず飲んでいた牛乳を口から噴き出してしまった。

なっなんで・・・！？

ニュースを見ると、それは今度発売になる週刊誌が報じたものらしく、覆面レスラー4人組がアルトだと名乗ったところから歌った曲まで割と詳細に語られていた。

まさかこんなふうにニュースになるなんて思わなかった・・・

こんなふうにはニュースにはなったものの、別に隼人の正体がバレたわけではない。学校に行ってみても普通にみんなが挨拶してきていつも通りの日常が待っていた。

英二からは妙な視線を送られるが、隼人が遅刻寸前に登校したため、まだ会話をしていない。

朝のホームルームが終了したとき、案の定英二が隼人の席までやって来た。

「まさかこうなるとは思わなかった」

正直にそう言うと、英二が気難しい表情をした。

「正直俺も思わなかった。マジでアルトってすげーんだな」

「すげーって何が？」

「顔出していないインディーズがメディアでこんな注目されるなんてないだろ。普通は」

そういうことは隼人にはわからなかったが、たぶん朝のニュースで1番有名だと思われるものに報道されてしまった。

「けど大丈夫だろ。覆面してたし、あれを見てた人なんて俺の周りには絶対いないだろうし」

妙に自信満々に隼人は答えたが、何気なく見た教室の外を歩く人を見て固まってしまった。

「あ・・・いたいた。やっぱり友紀と同じクラスだったんだね」

そこにいたのは昨日ライブハウスで会った、変態扱いされた女の子だった。佐山友紀に似ているからよく覚えている。

「なんで・・・えっ!？」

「昨日『佐山さんに似てる』って言ってたけど、間違いじゃないかもね。私たち双子だから」

その言葉に隼人は胃の中の消化物が逆流してくるかと思った。

「菜穂^{なほ}、どうしたの？」

友紀がやって来て、その子を出迎える。彼女の名前は菜穂というらしい。後で聞いた話だと、菜穂が姉の二卵性双生児だそうだ。

「ううん。昨日ライブハウスで」

「ちよつと待ったー!!」

隼人は慌てて大声を上げて、その会話の流れを断ち切った。とにかく彼女に口止めしなきゃと手をがしつと掴み、

「話があります！」

屋上へと連れて行つた。

「昨日のことは誰にも言わないでください！」

「へ？別に女子トイレに侵入してきたことなんてもう覚えてないから大丈夫だよ」

「え……」

隼人はアルトのことを口止めたつもりでいたのだが、菜穂はわかっていないらしい。というよりも、もしかしたら彼女は気づいていないのかもしれない。

だったらこれ以上言うべきではない。

「それより、昨日ぶつかったときこれ落としたでしょ？」

菜穂が差し出したのは、隼人の生徒手帳だった。昨日制服姿でそのままライブハウスに行ったのだ。トイレで着替えようとしたとき、落としてしまったらしい。

「ありがとう」

「いいよ」

まるでアネゴのような笑顔に、なぜか隼人はどきっとしてしまっ
た。

第5回 変な噂

菜穂と教室に戻つてくると、廊下では友紀と英二が待つていた。友紀が特に何かを気にしている素振りは見られないので、英二が上手くフォローしてくれたのだろう。隼人は幼なじみに感謝した。「そうだ！昨日のことで思い出した」

急に菜穂が声を上げる。

「昨日アルトってグループがライブハウスに来てたよ。友紀、好きだったよね？」

「えええ・・・それ朝もテレビでやってたけど、本物なのかなあ・・・」

「どうやら友紀は半信半疑らしい。」

「わかんない。私あんまり好きじゃないから」

その姉妹の会話は隼人にとってヒヤヒヤものだった。だけど、菜穂がアルトを好きではないことに少しだけほっとした。

よかった・・・もし好きだったら、歌声でわかつちやつたかもしれない・・・

「それにしてもこうやって4人揃うと、入学式のこと思い出すなー」

英二が自然な流れで話を変えたと思ったのだが、その内容に対して隼人は疑問を抱いた。

「入学式？」

「なんだよ隼人、覚えてないのかよ。俺たち2人座る席間違えて、佐山さんたちのトコ座っちゃったじゃん」

そういえば、高校の入学式で、隼人と英二は純粹に間違えて隣のクラスのイスに座ってしまったことがあった。

「それって佐山さんたちの席だったの？」

きょんとんとして訊くと、英二がケラケラと笑った。

「ほんとに覚えてないんだなー」

友紀と菜穂のほうを向くと、友紀は困ったように笑っていたが、

菜穂はにやりと笑って、

「その頃から変態だったんだね」

とぼそつと呟いた。

「——っ！！」

「うそうそ。冗談だってば」

軽く笑って菜穂は受け流すが、隼人にとっては友紀の目の前でも
う何も言ってほしくないというのが本音だった。

放課後、1人足早に帰ろうとしたとき、何人かの別の高校の制服
を着た女の子が正門近くでたむろっているのが見えた。

特に気にすることもせず隼人が通り過ぎようとすると、

「あー」

と、なぜか声をかけられた。心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。

「すみません。ここに西園寺先生っていう人いますか？」

「西園寺・・・？さあ、いないと思いますけど」

素直に答えたが、彼女たちはうーんと何かを考え込んでしまった。
そして、互いに顔を見合わせて頷く。

「絶対この先生だと思うんですけど・・・」

だけど、たぶんいないと思う。そんな金持ちそうな苗字の先生は
と、そのときだ。

「西園寺先生なんていませんよ」

正門の前を自転車で通りかかった佐山菜穂が困ったように笑いながら近づいてくる。それから隼人の手をぎゅっと掴んだ。一瞬どきつとした。

「行こ？早くしないと図書館の席いっぱいになっちゃうよ」

何のことなのかさっぱりわからなかったが、菜穂に目で何かを訴えかけられたので隼人も合わせることにした。

「西園寺先生なんてこの学校にいたっけ？」

純粹に悩んで菜穂に訊ねると、彼女は心底呆れたような顔をした。「何言ってるの。そんな先生いるわけないじゃない。あの子たちはね、さつきも別の男におんなじこと訊いてたよ」

「え？なんでだろう」

「大体予想はつくけど・・・知りたいならこっそり見てみる？」

その言葉で、正門まで戻ってみると、同じように彼女たちは男子生徒の1人に西園寺先生の質問をしていたところだった。しかし、隼人のときと違ってすぐに解放されているが。

「マジで何してるんだろ。あの人たち」

「声だよ。たぶん」

こっそりと覗いていると、少しだけ会話が聞こえてくる。なぜかアルトがどうか聞こえるのは気のせいだろうか。

「西村君も覚えてるでしょ？昨日覆面かぶったグループがアルトだつて名乗ったこと」

「ああ・・・そういえばそうだったね」

隼人は曖昧に答える。

「そのボーカルと背格好がよく似た男の子がこの制服着てたって昨日ちよつとした噂になったんだよ」

「へー・・・そうなんだ」

びくびくしながら答えたが、よく考えてみて隼人はようやく気づいた。

「まさかそれって俺のこと!？」

「そうかもしれないね。あんなトコに制服で来てたのって、西村君くらいだし」

やっべー・・・いつものクセでそのまま行っちゃったんだ。

「だからきつと声を聞いてんだよ。西村君にしつこかったのは、声質が少し似ていたんじゃない？」

似てるも何も、俺が本人だ。確かに彼女たちはいい耳をしているのかもしれない。

「ありがとう。さっきは俺を解放してくれたんだ」

「一応、変態心に火をつけられないようにね」

「言っておきますが佐山さん。俺は変態ではないんですよ。こう見えても純情男なんです」

「純情? 私、西村君のことよく知らないし」

「じゃあ、これから知ってればいいよ」

それは何気なく言っただけなのに、菜穂が俯いてしまったのを見て急にしまったと思った。

「もちろん、友達としてだよ!」

慌てて言い直すと、菜穂はわかってると言ってくくくと言った。

「じゃあ、佐山さんって呼ぶのやめてよ。友紀とこっちゃんになる」

「・・・じゃあ・・・アネゴで!」

たぶんこのとき、隼人はかなりの外れなことを言ったのだろう。わかってて、そう言った。

第6回 チャンス

昼間他校の女子が来ていたことをアルトのメンバーに話すと、案の定制服でライブハウスに来ることを禁じられた。

「よくバレんかったなー」

直人が不思議そうに訊ねる。

「俺、知らない人と初めて話すとき、なんか声変わるみたいなんです。だからかも」

でも、気をつけたほうがいいことはわかっていた。

「にしても、リーダー遅いな」

台の上に座ってベースをボロンと鳴らしながら、和馬が呟く。直人が気づいて顔を上げる。

「プロデューサーに呼ばれたって言ってたけど」

「よし、隼人。ちょっと様子見に行ってこい」

「ええ！？なんで俺が・・・」

結局そういう役回りは自分に回ってくるらしい。隼人はスタジオ内でリーダーを捜すことになった。

大体プロデューサーと話しているのなら、見に行っただって仕方ないような気もするが。

と、そのとき、黒髪的眼鏡をかけた男性——リーダーの透也が視界の片隅に入った。

「リーダー！」

隼人が駆け寄ると、ちょうどプロデューサーである一宮^{いちみや}が目に入った。いつ見てもやり手のサラリーマンに見える。

「こんにちは！」

「こんにちは、隼人君。ちょうどよかった」

一宮が何か話そうとしたときだ。リーダーがそれを遮るように隼人の背中を押す。

「すみません。もう時間があまりないので今日はこれで失礼したいと思います」

それは丁寧な言葉というよりも、強引に話を終わらせているようにも思えた。

「リーダー、一宮さんと何話してたんですか？」

メンバーのところへ戻るとき、隼人はこっそりと訊ねてみた。

「次に出す新曲のことについてだよ」

それ以上は言おうとしない。たぶん何かあったんだろつなと隼人は直感した。

翌日の放課後、また正門に他校の生徒がいるかもしれないと警戒していたが、どうやらないようだった。

隼人はほっとして自転車にまたがったが、

「隼人君」

名前を呼ばれて、心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。

「一宮さん！」

振り返ると、もうすぐ夏だっていうのにびしっとスーツを着こなしている音楽プロデューサーの姿があった。

「こんな所でどうしたんですか？」

「1度君とゆっくり話がしたいと思ってね。ちょっと今いいですか？」

「少しなら大丈夫です」

隼人たちが向かった所は近所の喫茶店だった。隼人はウーロン茶を頼み、一宮はホットコーヒーを頼んだ。

とりあえず一口飲む。

「隼人君はメジャーデビューしたいとは思いませんか？」

いきなり何の前置きもない話に、隼人は口に含んだお茶を噴き出すかと思った。

「も・もちろん思います！したいです！」

熱を入れて話すと、一宮は苦笑した。

「私も同じ気持ちです。君たちはこんなところで埋もれていい存在じゃない」

隼人はテンションが上がってくるのを感じた。この話を他のメンバーが聞いたらどう思うだろうか。絶対喜ぶに決まってる……！

「俺たち……デビューできるんですか！？」

「私はすぐにでもそうしたいと思ってます」

「なら……！」

「ですが」

一宮は一呼吸入れた。

「デビューしたら君は満足に高校に通えなくなるかもしれません」

「そんな大丈夫です！卒業さえできればいいんですから」

「そうじゃないんですよ」

一宮が深く息を吐いたのがわかった。

「実はこの話はずいぶん前からリーダーである透也君に持ちかけてるんです。しかし、いつも流されてしまします……。もう1度訊ねますが、君はデビューすることで今までどおりに友達とつきあえなくなっても構いませんか？」

隼人は急に答えられなくなってしまった。まさかそんなことまで

考えていなかった。

もしそうだったらどうしよう。俺はアルトと友達、どっちを選べばいいんだろう……

一宮はそんな隼人の反応を見て静かに言い放った。

「それを気にして透也君もなかなか了承しません。ですが、プロデューサーとしての経験から1つだけ言っておきます。今デビューせず、例えば君が高校卒業後にデビューしたとしても、絶対売れない。断言します」

隼人は何も言えなくなってしまった。

喫茶店からの帰り道、隼人は無意識に高校へと向かっていた。

デビューしたらもう友達とは今までどおりにつきあえなくなる……

・それを聞いて急に怖くなってしまった。

・何かを手に入れるためには、何かを失わないとだめなんだろうか……

隼人にはどっちも失うことができなかった。どちらも大事なものだった。

……ただ……ただ……

こんなチャンスはもう二度と来ないかもしれない。今までこんなチャンスにめぐりあえなくて泣いた人はどれくらいいるのわからない。

チャンスなんだ。

隼人は固く手を握り締めた。

第6回 チャンス（後書き）

現実ほこんなにあっさりいくとは思ひませんが、
小説なんでアリというこゝで……

第7回 デビューしたい

土曜日、学校が休みの日はたいてい隼人はスタジオに1日中もつていた。

「デビューしよう!!」

隼人がそう言い出したとき、和馬と直人は「はあ？」と呆けた声を出し、リーダーだけが何も言わずに顔を上げた。

「おい隼人・・・デビューなんてそんな簡単にできるわけないだろ」

和馬が呆れたように歌う。 たった今即行で作ったデタラメな曲だった。

「俺もできるんならしたいな」

和馬の調子に合わせて、直人もギターで歌い始める。

隼人はちらりとリーダーを見ると、いつのまにか俯いて楽譜の手直しをしている。

「リーダー・・・デビューしたいです・・・」

「無理」

あっさりと彼は言い放った。

「簡単にできるもんじゃないよ」

「リーダーがうんって言えbaumうメジャーデビューできるってこと・

・俺は知ってるんです」

「俺はうんって言う気はない」

「なんでですか！俺が高校生だからですか!？」

リーダーが顔を上げた。眼鏡ごしにまっすぐな視線を向けられ、隼人はそれ以上何も言えなくなってしまった。

直人と和馬が驚いた表情で固まっている。2人は今何も言わないほうがいいことを知っている。

「俺は・・・例えば今デビューしたとしてもだめになるような友達はいない」

リーダーは何も言わない。

「今が俺たちにとつてのチャンスなんです。きっと・・・これが最初で最後の・・・」

今さらになって大声を出したことを後悔し始めていた。

思い返せば、リーダーに反抗したことは初めてだった。だから、今めっちゃめっちゃ怖い。

結局その後はダッシュで逃げてしまったので、リーダーがどう思ったのか隼人が知ることはなかった。

翌日は日曜日で打ち合わせを行う日だったが隼人は気分が乗らず、なんとなくこないだ歌わせてもらったライブハウスまで来ていた。中に入らずに、ただあのときの興奮を思い出していた。

歌いたい・・・またライブしたい・・・!

その思いはだんだん強くなってしまった。今さらもう戻ることはできない。

と、そのときだ。ライブハウスの中から見知った人が出てくるのが見えた。

「佐山さん・・・?」

それは佐山菜穂だった。隣には若い男がいて、とても仲良さそうに見えた。

なぜかこれ以上見ていられなくなった。

気がつくとも、無意識に隠れてしまっている自分がいて、隼人は情けなくなってしまった。

なっさけねー・・・こんなだからリーダーにも心配されるんだろうな。

メンバーの迷惑にはなりたくない。

菜穂たちが立ち去った後、道の真ん中に何かが落ちているのが見えた。

「・・・・・・・・・・？」

思わず拾い上げると、それは菜穂の生徒手帳だということがわかった。

それだけなら明日返すだけの話だ。しかし、生徒手帳からはみ出しているものが見えて、逆に気になってしまった。

——なんで自分の写真があるんだろう・・・？

その後、おそろおそろスタジオに行くと、プロデューサーの一宮がいた。

「あれ・・・一宮さん、どうしたんですか？」

「ああ、透也君から話があると言われて来たんですよ」

部屋の奥にはすでに他のメンバーが到着していた。和馬がこっちに来るように手招きをしてくる。

そこへ行くとき、リーダーの前を通る。なんとなく緊張してしまった。

「これで全員揃いましたね。それで、話とは？」

一宮が静かに切り出す。もちろん、それに答えたのはリーダーだった。

「単刀直入に言います。デビューの件、ぜひこちらからお願いしたいと考えています」

「えっ・・・！」

一番驚いたのは隼人だった。思わずリーダーを見ると、無表情だった彼の顔が急に優しくほころんだ。

「なんだよ。デビューしたいって言ったのはお前だろ」

「そうだけど・・・いいんですか？」

「正直、お前が高校卒業するまではって思ってたんだけどな。俺が高校中退だから・・・だけど、やっぱりこれが最初で最後のチャンスだって俺も思う。逃したくない」

リーダーが中退したなんて初めて聞いた。驚きと嬉しさでどう反応していいかわからずにいると、すぐ後ろにいた和馬に頭をぐしゃぐしゃとされた。

「隼人やるなあ！リーダーにたてついたもんな！」

「そっそんなつもりないよ！」

さらに直人にも頭をぼんぼんと叩かれ、これ以上言い訳することができなくなった。

「よかった・・・じゃあ、本格的にこの話を進めていきたいと思います」

一宮が嬉しそうに立ち上がると、待ってくださいとリーダーがそれを制する。

「生意気を言うようですねが・・・俺たち、いきなり顔を出すのはちょっと・・・」

「わかってます。ですが、いつかはそのときが来ることを忘れない

で下さい」

リーダーがこくと頷くと、一宮も納得したように頷いた。

アルトのメジャーデビューが決まった。

第8回 俺とつきあえば？（前書き）

急に恋愛モードに入ってしまった。

まあ気楽に読んでください……

第8回 俺とつきあえば？

「デビュー！？」

「うん。たぶん夏頃にできると思う」

幼なじみの英二に初めてメジャーデビューの話をしてみた。案の定すごく驚かれたが。

「英ちゃんにはいつも迷惑かけてるから、1番に教えたかったんだ」

その言葉に、英二は少しだけ困ったような顔をした。

別に深い意味があつて言つたわけじゃないんだけど、その反応に隼人は驚いた。

「マジですげーな。じゃあ、正体明かすんだ」

「まだわかんない。名前は公表すると思うけど」

そのとき、廊下を歩く菜穂を見かけて、こないだ彼女が落とした生徒手帳のことを思い出した。

「あ、ごめん。ちよつと・・・」

隼人は急いで菜穂を追いかけていった。

「佐山さん！」

アネゴと呼ぶと言つたのにすっかり忘れてしまっている隼人は、苗字でそのまま呼んでしまった。

「おはよー。どうしたの？」

「これ、こないだのライブハウスの前に落ちてたんだけど」

見かけたとは言わずに、隼人は生徒手帳を渡した。はじめはそれを不思議がつていたが、やがて思い当たる節があつたらしく、すぐにそれを受け取ってくれた。

「わ・・・全然気がつかなかった。ありがとう」

「いいよ。お互い様だしね」

じゃあと言つて教室に戻ろうとすると、急に後ろから「あっ」と菜穂の声がした。

菜穂は生徒手帳の中身をおそろおそろ確かめてしまったという表情をしている。隼人が見ていることに気がつく、明らかに顔をそむけるのがわかった。

「見た？」

たぶん写真のことだろう。

「見た」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が続いた。

「俺からも質問だけど・・・それ落としたとき、一緒にいた男って彼氏？」

「え？違うよ。たぶんいとおのお兄ちゃんだと思う。一緒にライブ見に行ったんだ」

「・・・・・・・・ふーん」

「・・・・・・・・うん、じゃあ」

ダッシュでその場から菜穂は駆け出していった。

たぶん隼人は気づいていた。菜穂の気持ちと、それから自分自身の気持ちに・・・・・・・・

「ちょっと待ったー」

気がつくと菜穂の後を追いかけている自分に気づいた。教室に入

ろうつした菜穂を強引に廊下まで引つ張り出す。

「わっ・・・なによ？」

「ちよつと言いたいことがあつたんだけど、その前に1つだけ」
隼人はなんとなく深呼吸をする。

「アルトって知ってるよね？」

「知ってる・・・けど、あんまり好きじゃない・・・かも」

そんなような気はしていたが、いざ面と向かって言われると少しショックだった。この調子だと、本当に目の前の人間がそのボーカルだとは気づいていないようだ。

「友紀は好きだよ。よかったじゃん」

そう言われて曖昧に隼人は頷く。あいまい

本当は今、自分がアルトのボーカルで、今度デビューすることが決まったということを話そうと思っていたのだ。だけど、好きじゃないと言われたらそれも微妙だ。

やっぱ言えないよな・・・

そう思ったとき、菜穂が何かを言おうとしていることに気づいた。

「んっ・・・と、生徒手帳の・・・ごめん。あの、なんていうか」

写真のことを謝ろうとしていることに気づいて、隼人は顔が赤くなるのを感じた。

「大丈夫。変態だつてことは内緒にしとくから」

「変態じゃないよ！」

「隠し撮り？」

「違う。友紀にもらっただけだつて！」

そんな会話を繰り返していて、隼人は菜穂の表情がころころ変わるのを見て苦笑した。

「やばいわ。すげーハマったもん」

「はあ？なにが？」

「もつと長い時間かけるものだと思ってたけど、そういうわけでもないんだな」

ひとり言を呟くと、菜穂がわからないと言って首をかしげた。

隼人は意味もなく髪の毛をかきながら、目線をそらす。

「あのさ……俺とつきあえば……？」

言い方が微妙だとすぐに思ったが、もう1度言い直すなんてこっぴどくかしくてできなかった。

しかし反応はない。ちらりと菜穂を見ると、彼女は半信半疑な表情でこつちを見ていた。予想外の反応だ。

「え、なに？」

「だって……西村君って友紀のこと好きなんだと思ってた」

「たぶんこないだのライブハウスで誰かさんに変態扱いされなかったら好きだったと思うよ」

そこまで言うと、菜穂は頬を赤くしてまた俯く。だけど、大きくこくと頷くのがわかった。

その頃、一宮プロデューサーと新たにアルトのマネージャーになることになった男との間で、1つのことが決定しかけていた。

「ラジオの公開生放送ですか」

「はい。それにアルトを出演させるのはどうかとの話が来てるんです」

「少しかけて、一宮は頷いた。
いいですね。そのくらいなら大丈夫でしょう」

第8回 俺とつきあえば？（後書き）

友紀とつきあわずにこうなりました。

次回からまたどうなっていくんでしょう…：か？

第9回 公開生放送

デビュー曲発売日まで2週間を切り、いよいよ本格的にその準備をすることになった。

散々話し合った結果、記念すべき最初の曲は『花びら』に決まった。隼人が作詞しただけあって、それはすごく嬉しかった。

すでにタイアップも決まっているらしい。夏休みに上映予定の映画『真夏のサンタクロース』だ。出演者が超有名人でかなり驚いてしまった。

それからもう1つ。CD発売日にラジオに出演することが決定している。しかも公開生放送だ。

「隼人、今日学校休む理由言っであんのか？」

「あ・・・たぶん風邪つてことになってると思います」

「んー・・・それじゃあ顔出すのまずいだろ」

直人の言葉に、隼人は大丈夫だと言って、とあるアイテムを取り出した。

「じゃーん！伊達眼鏡〜！」

意味もなくドラえものの道具を出すような調子で言ったが、誰もウケてくれなかった。

「まさかそれかけて変装なんていうんじゃないだろうな」

和馬が呆れて言い放つ。

「そうです。これかけてワックスで髪立たせると、俺意外にかっこよくなるんです・・・っていうのは冗談で、別人に見えるって前に友達に言われたことがあって・・・」

そのときにテンションが上がっているのはどうやら隼人だけらし

く、他のメンバーはしばらく何も言わなかった。

やがて和馬が立ち上がってこっちに歩み寄ってきた。そして、隼人の髪の毛をぐしゃぐしゃとし、強引に眼鏡をかけさせる。

隼人の言う変装のできあがりだった。

「バレる」

それがメンバーの感想だった。

「だったらお前、ただ帽子かぶってたほうがまだバレないと思う」

結局、隼人は帽子を深くかぶることになった。

実際にやってみると、意外に顔が隠れてしまい、下手にいじるよりもこっちのほうがいいかもしれないと思った。

確かにバレるわけにはいかない。学校もそうだが……

菜穂にバレたくないなあ……

好きじゃないと言われた以上仕方がない。だけど、少しでも好きになってもらえるように頑張ろうと隼人は思った。

7月の上旬の水曜日がやって来た。

公開生放送のスタジオで、隼人は初めてアルトだと面と向かって自己紹介した。

「はじめまして！パーソナリティの秋本陽子です。うわー……私大ファンなんです」

ショートカットの女性がテンション高めに自己紹介をする。

「皆さん素敵です！顔出さないなんてもったいないですよ」

「いや、はは……どうも」

和馬が照れくさそうに答えた。

その後、簡単な打ち合わせをし、おおよその流れを掴んだ。

そして、正午少し前、隼人たちがスタジオ入りすると、すでにその周りには大勢の観客がいて驚いてしまった。圧倒的に女性が多いが、男性もいた。

秋本も驚きのあまり、感心しまっている。

「こんなにお客さんが多いの、初めてかも・・・」

今さらになつてなんだか緊張してきたが、大丈夫だと自分に言い聞かせて帽子を深くかぶり直した。

とにかく・・・落ち着け。

それから、明らかに自分より緊張している直人を見て、なんとか落ち着くことができた。

正午。放送が始まった。

秋本が最初の挨拶をしてから、すぐに話が本題に入る。

「——それでは、お待ちかねの今日のゲストは・・・アルトの皆さんです！」

「よろしく願いしまーす！」

同時に周囲の観客がわぁと盛り上がる。

「アルトは未だに顔を出していない正体不明のグループでしたが、その人気は今ここに集まっているファンの方々の数を見ればわかります！かくいう私も大ファンなんですよー」

「わ、ありがとうございます」と、リーダー。

「最初ですので、まずは自己紹介からお願いします。じゃあ・・・ボーカーの隼人さんから」

瞬間的に、隼人は自分に気合を入れる。

「はい。ボーカルの隼人です！」

外の観客が盛り上がる。この瞬間、隼人はアルトとして初めて世間に受け入れられた。

放送終了後、隼人たちは新曲『花びら』にサインを入れた。それを視聴者へのプレゼントにするらしい。

とにかく、これで初めてメジャーデビューしたアルトの活動は終わった。

自宅に帰ってから、ようやく自分のケータイに着信があることに気がついた。

佐山菜穂だった。

「あ、もしもし佐山さん？電話気づかなくてごめん。どうしたの？」
かけ直してみると、しばらく向こうから応答がなかった。隼人は急に不安になってしまった。

「佐山さん？」

「……………今日高橋君から、西村君が風邪ひいたって聞いて……………」

幼なじみの高橋英二がきつとそう言ってくれたのだろう。隼人は風邪のせいで今日休んでいる、と…………

『迷惑かなって思ったんだけど…………大丈夫…………？』

その言葉を聞いて、どうしようもない気持ちになった。

菜穂は自分が今日風邪で休んだと信じて疑っていないのだ。それがわかって、辛かった。

「大丈夫だよ。心配かけてごめん」

嘘ついて、ごめん。

第9回 公開生放送（後書き）

帽子をかぶったはいいものの、
本番ではおそらくとっていたと思います。
ヘッドホンつけるので…

第10回 幸せ

翌朝のニュース。芸能のコーナーでアルトのことが報じられた。自分が出ているものを見るのは妙に照れくさかったが、デビューしてもどうしても隼人は気になることがあった。

「どう？母さん」

それは、テレビに映った自分が、本当に西村隼人だとわかるかどうかだった。

「んー・・・っていうか座る席が悪いんじゃない？一番奥なんて顔全然見えないし、横顔じゃない・・・誰もアンタだって言われなきゃわかんないわよ」

「マジで？よかったー」

「はあ？それが嫌だったんじゃないの？」

母は心底不思議そうに訊ねてくる。

「まだクラスの人には言わない」

デビューしたけれど、クラスメイトにそれを言うつもりはなかった。というか、それが一宮プロデューサーの言葉だった。

『隼人君、君は卒業するまで周囲にはアルトだということは伏せておいてください』

理由はわからなかったが、卒業するまではアルトのテレビ出演もないらしい。

とにかく隼人は自分の正体がバレないようにしなければならぬのだ。

結局昨日は本番前に帽子を取らなくちゃいけないことに気づいてヒヤヒヤしたが、実の母親がわからないというのだから大丈夫だろ

う。

しかし、小心者の隼人はやっぱり肩身が狭い思いで登校した。

「よっ！隼人ー」

たまたま会った友達に挨拶されたとき、一瞬心臓が飛び出るかと思った。昨日の生放送のときはまた違った緊張だ。

最も緊張したのは佐山友紀におはよーと言われたときだ。彼女は確かアルトが大好きだと言っていたはずだ。

「風邪大丈夫？」

「う、うん。もう大丈夫」

しどろもどろになりながら答える。とにかく昨日の話からすぐに離れたかった。

「英ちゃんって来てる？」

「あ・・・うん。来てるよ・・・」

そのとき、なぜか友紀の様子がおかしいことに気づいた。そういえば、この前も英二の様子がおかしかったような気がする。

そのとき、英二が戻ってきた。なんとなく様子がおかしい。

「英ちゃん、おーっす・・・」

相手の反応を窺いながら隼人は挨拶をする。

「ああ・・・隼人か。おっす」

「ああって・・・お前どうしたんだよ。元気ねえな」

隼人の問いにすぐには答えず、英二は教室を見渡した。そして、ある一点で止まったかと思うと、目を伏せてしまった。

振り返ってみると、そこにいたのは・・・佐山友紀だった。

「佐山さん・・・・・・・・？」

視線を英二に戻すと、すでにそこにはいなかった。

隼人が真実を知るのは、それからしばらく後のことだった。

「——昨日？」

「うん。俺休んでる間になんかあった？」

別のクラスの菜穂に、さっき感じた違和感のことを訊ねてみたが、

「さあ・・・別に昨日の友紀は普通だったけど」

「そうだよなあ・・・」

お昼休み、たまたま学食で会った隼人たちは一緒に屋上でごはんを食べることにした。

人が他にいないため、2人だけになると妙に緊張してしまった。

隼人は買ったばかりのパンの袋を開けた。

「いつもそういうもののなの？」

隣に座っている奈穂がパンを見ながら言う。

「まあ・・・ウチの親、朝早いときが多いからなー」

「もし迷惑じゃなかったらさ・・・私作ってきてもいい？」

一瞬、隼人の思考が全て停止した。

マジで？なんかよくある彼女に弁当作ってきてもらってヤツか？

「うん・・・！楽しみにしてる！」

その一言で奈穂がはにかんだように笑ったのが嬉しかった。

こういうのを平凡な幸せっていうんだろうな・・・なんかいいな、

こっついの・・・

1週間後、次に発売予定のアルバムのレコーディングが行われた。その最中に、マネージャーの池田からその連絡を受ける。

「週間オリコンチャート1位！？池ちゃんマジでえ！？」

「超マジー！！」

池田と和馬のノリはめっちゃ合う。漫才コンビだ。

ちなみに池田は三十路前。^{みそじ}臨機応変な男で、一見軽そうに見えるのだが、上司の前ではかなり礼儀正しくなる男でもあった。

「やったな隼人！初めての歌詞がオリコン1位だぞ！」

直人の声で和馬も集まってきて、なぜだか隼人は袋叩きになってしまった。

「う・・・うれっ・・・嬉しいです！」

こんなに幸先がよくて逆に怖くなる。これ以上の幸せはもう絶対ないだろう。

隼人はたった今感じている幸せを十分に噛みしめた。

第11回 初デート

夏休み。こういう長期休暇は隼人にとって都合が良かった。とにかく1日中スタジオに入り浸る。

ちなみに、スタジオと言っても他人が考えるようなものではない。元々一宮が所有していた部屋を改造してそれっぽくなったのがアルトのスタジオだ。

だから、誰もいないときに1人でいることなんて結構ある。

そして、今日もそうだと思ってスタジオに入ったら、なぜか2人の人間がいた。1人は和馬だったが、もう1人は女の人だった。

「よっ、隼人ー！」

「げっ・・・和馬さんいたんですか」

「げってなんだよ、げって」

隼人の視線はすでに和馬から女の人に向いている。そういえばこの人は前にも会ったことがある。

「あ・・・和馬さんの彼女さん・・・でしたっけ？」

「久しぶり、隼人君」

綺麗に化粧された顔がにつこりと微笑む。すごく美人だ。

「おーい。何度も言ってるだろ。そいつは年齢サギの人妻なんだって」

あいかわらず机の上に座って、心底不愉快そうに和馬が言う。

「ちよつと和馬君。年齢サギってなによ。私まだ29歳なんだけど」

「それでハタチとか言ってるんだから立派なサギだろ」

ようやく隼人も思い出した。

彼女は、去年までよくスタジオに遊びに来て、差し入れを持って

きてくれた和馬のいとこだった。確か名前は・・・咲さんだったか？

「和馬君モテるんだから、彼女の1人でも作ればいいのに。そうすれば、その減らず口もなくなるかもしれないしね」

咲がぶーたれる。

「俺はベースさえあればいいのー。ってか、今はアルトとして頑張りたいから彼女気遣う余裕がない」

「だからデビュー前に、ずっとつきあってた彼女と別れたんだ」

「えっ・・・！」

隼人は驚いた。

和馬に彼女がいたことは知っている。だけど、別れた話なんて聞いてない。

和馬さんはいつも彼女が好きだって言ってた・・・まさか別れたなんて・・・

「俺がアルトと彼女、両方背負える余裕ができたらもう1回告白しに行くよ。そんときに向こうに彼氏がいたら、俺は黙って影から応援するんだよ」

いつもひょうひょうとしている和馬が急に大人に見えた。

「隼人？どうした？」

和馬から問いかけられ、隼人は答えられなくなってしまった。

自分は逆だった。デビューより前に、好きな人に告白した。だけど、夏休みになっても1度もデートしていないし、今まで全然気遣っていないことに気づいた。

俺はアルトと菜穂、どっちも守ることができるか――？

急に不安になってしまった。

「ごめん・・・待たせた？」

「ううん。私が早く来ただけだから」

7月の終わり、隼人は菜穂をデートに誘った。

菜穂の私服を見るのは初めてではないのに、デートが初めてだからだろうか。なんだか妙に緊張してきた。

ここへ来てようやく隼人は行き先を全く考えていないことに気づいた。やばい・・・

「どこか行きたいところある？」

試しに訊いてみると、菜穂は少し困ったような顔をして隼人の表情を窺^{うかが}ってきた。

そして、一言。

「西村君って電化製品に強い・・・？」

菜穂の話によると、佐山家では最近DVDプレーヤーの調子が悪くなり新しく買ったらしいのだが、説明書を見てもつなげ方がよくわからないそうだ。

それをやってくれないかと隼人はお願いされた。

電化製品とは相性がいいほうだと思う。だからそんな頼みはお安い御用だったし、どさくさに紛れて菜穂の家に行けるのはラッキーだった。

「散らかってるからね」

何度も念を押されて、ようやく入れてもらった佐山家は綺麗な一

軒家だ。全然散らかっていない。

「お邪魔しまーす・・・」

かなり緊張しながら家に入ると、いつも友紀や菜穂から感じる匂いがあった。こういうのを家の匂いっていうのだろうか。

家の中は静かだった。

「みんな出かけてるからそんなに固くならなくて大丈夫だよ」

菜穂は気楽に言うが、彼女はわかっているのか？一応俺男なんだけど。

DVDの配線は隼人が思っていたよりも簡単なものだった。説明書を見てつなげていき、10分でその作業は完了した。

その頃、菜穂はお茶を淹れてくれていた。

「すごい！できたんだ！」

「うん。俺結構機械に強いのかも」

「わーありがとう。助かった」

会話がそこで途切れた。どこかでコチコチと秒針の刻む音が聞こえてくる。

やべえ・・・2人きりなんだよな・・・

意識する、この瞬間。

「——ここって佐山さんの家でもあるんだよな。なんかそう思うと新鮮だな」

軽い調子で言うと、菜穂は何か答えようとして・・・やめてしまった。

「どうしたの？」

「あ・・・ううん、別に・・・」

「言いたいことあるんだったら言ってよ。気になるじゃん」

急に不安になってきた。奈穂がこくと頷くのを見て、ますます緊張してきた。

「あのね・・・私たちってつきあってるんだよね・・・?」
どくと心臓が高鳴った。

第12回 彼女の家で

「私たちって・・・つきあってるんだよね・・・？」

一瞬どきつとしてしまった。この後の奈穂の言葉が怖かった。

「——俺はつきあってるつもりでいたんだけど、佐山さんは違うの？」

もっと男らしく言えたらいいんだけど、今の隼人にはそれが精一杯だった。情けない。本当に頼りない。

やっぱり菜穂は不満に思っていたんだ。俺は全然菜穂のこと考えてなかったもんな・・・

だけど、菜穂は頬を少しだけ赤くして急に向こうを向いてしまった。

「・・・佐山さん？」

「今こっち見ないで」

「へ？なんで？」

見るなと言われると見なくなる。しかし、隼人は奈穂が照れていることを知っていた。

こんな小さなことで喜んでくれることが嬉しい。だから、何も言えないでいることが辛かった。

「佐山さん」

「ん？」

「俺・・・今は言えないんだけどちょっとしたバイトみたいなやつてるんだ。それで・・・あんまり一緒にいられないかもしれない」

菜穂はきょとんとしていたが、やがて小さくこくと頷いた。

「そんなに忙しいバイトなの？」

「忙しいときもあるけど、そうでもないときもある」
曖昧にしか答えることができなかった。

「・・・下の名前で呼んでくれるんらいいよ」

「え？」

「佐山さんってやめてよ・・・呼び捨てでいい」

菜穂にきつと睨みつけられ、そういえばやめろと言われてから1度も呼んでいないことに気がついた。だから、時々反応が微妙だったのか。

改めて顔を菜穂に向けると、彼女はあさつての方向を見ている。

あ・・・今・・・

「菜穂」

名前を呼んでみて振り返った彼女に、隼人は初めてキスをした。

「ただいまー。あれ、なんか靴がある」

それは突然の出来事だった。ちょうど部屋にあったDVDを菜穂と一緒に見ているとき、玄関のドアが開いた。

「お母さんだ・・・！」

「えっ嘘！」

まさか帰ってくるなんて考えていなかったから、まるで浮気でもしていたかのように慌ててしまった。

しかし、驚いている間にリビングの扉が開いた。

「菜穂？・・・あれ、友達？」

「あ、うん・・・彼氏」

現れたのはどこかで見たことがあるような清楚な女の人だった。言われなくてもわかる。この人が菜穂のお母さんなんだ。

そんな人と、今隼人は目が合っている。

「は、はじめまして・・・！菜穂さんとおつきあいさせてもらってる西村隼人といいます！」

緊張で上手く口が回らない。とにかく好印象を持たれることだけを考えていた。

「あらー！はじめまして、菜穂の母です。やだ言つてよー。そうしたらいいもの買ってきたのに・・・」

「あ、あの・・・お気遣いなく」

隼人の言葉のすぐ後、玄関のほうから姿を現した人物と目が合った。

佐山友紀だった。そうだ、2人は双子なんだった。

だけど、隼人が挨拶しようとしたときにはすでに顔を引っ込めてしまい、友紀がリビングに現れることはなかった。

翌日の共同スタジオ。

「よっしゃ！行くぞ」

基本的にアルトは一発録りはしていない。ノリのいい曲でたまに行うが、演奏内容が甘くなるような気がするからだ。

その代わりマルチトラック録音というものでレコーディングをしている。時間がかかってしまうが、1人1人の音がちゃんと確認できるのだ。

今は和馬のレコーディングが行われている。

「和馬のベース、最近さらに上手くなったことね？」

隣に座っていた直人が感心しながら訊ねてくる。

「今はベースが恋人なんだって言ってました」

アルトとしてやっていくために、大切な人と別れた。それが和馬のケジメだった。

いつかアルトとして成功し、そのときに隣にその大切な彼女がいればいいと隼人は思う。

それだけ本気なんだってことがわかったから。

隼人にはまだわからない。

だけど、真実を菜穂に話したときに決めよう。案外なんでもないことのように言ってくれるかもしれない。

リーダーがヘッドホンをはずしてこっちに歩み寄ってきた。

「まだレコーディング続けるけど、2人とも大丈夫か？」

「もちろん。大丈夫っす」

時刻は夜の9時を回っている。

そのとき、ケータイのマナー音がした。慌てて部屋から飛び出して着信画面を見てみたが、英二からだとわかった瞬間、画面がふつと消えてしまった。

「あれっ？電池切れちゃった」

少し考えたが、

「隼人ー、次お前の番だぞー」

直人に呼ばれて、すぐに忘れ去ってしまった。だから、英二がどんな用でかけてきたのかなんて隼人が考えることはなかった。

結局その日は専用スタジオで寝てしまった。

だから、それを知るのは翌日の夜、レコーディングを終えてようやくケータイを充電したすぐ後のことだった。

「――応援？」

英二の用は、野球部が夏の地区予選で順調に勝ち進んでいるため、クラスのみんなで応援しに行くというものだった。

隼人のクラスに野球部のレギュラーが6人もいた……隼人だけが行かなかったそうだ……

第13回 友達の言葉

『一応家の都合で行けなかったってことにしといたけど、明日はどうだ？クラス全員応援に行くことになってるけど』

英二との電話で、隼人は無意識に奥歯を噛みしめていた。

「ごめん・・・英ちゃん、俺行けないわ」

『・・・仕事か？』

「ちよつと・・・打ち合わせがあつて、何時に終わるかわからない」

一瞬か、それとも永遠とも思える長い時間が経過して、隼人と英二は互いに電話を切った。

今、何を考えればいいのかわからない。

ただ自分1人だけがクラスメートの応援に行けないことが悔しかった。

「こういつのを恐れていたんです」

その日、たまたまスタジオに来ていた一宮が隼人の電話の様子を見ながら呟いた。隣では無表情のリーダーの透也の姿がある。

「彼は繊細だ。たぶん何かで目立つよりも、輪の中で友達と一緒に納まっていたいんですね」

「そう・・・かもしれませんね」

透也はわかっていたのかもしれない。隼人の性格からして、きっとクラスの輪についていけないことがどんなにこたえるかというところが。

それでも、デビューしたいという感情には敵わなかった。

「だけど、隼人にはそれ乗り越えてもらわないと困ります」
ひどい言い方かもしれないが、これは当人の問題だ。他人が口出しできることではない……

夏休みの補講日、隼人は久しぶりに学校に顔を出した。今までも何回か補講があっただが、仕事の関係で行くことができなかった。うしろめたい気持ちで教室の扉に手をかける。

結局野球部は負けてしまったと後から菜穂に訊いて知った。

ガラツ……

「おっ！隼人だー！お前今までサボりかよー」

「ほんとだー！隼人君おはよー」

「隼人ー」

意外にもクラスメートみんながにこやかに出迎えてくれて、隼人は拍子抜けした。

あれっ……？1度も応援に行かなかったこと怒ってると思ったのに……

そこで、ようやく英二が上手くフォローしてくれたんだと気づいた。彼の席を見ると、ちょうど英二と目が合った。

しかし、その表情はなかった。

「英ちゃん、いろいろ迷惑かけてごめん」

英二の席に行ってまず謝ると、なんとなくいつもよりよそよそしい態度で笑っただけだった。

「どうした……？」

そう隼人が訊ねたときだった。

「あ、西村君だ。おはよー」

「おはよー」

佐山友紀が今登校してきて隼人に挨拶してきた。そのとき、英二が別の方向を見たのがわかった。

「なんか久しぶりだね。西村君見るのって」

「そんなことないだろ。こないだ俺佐山さんち行ったじゃん」

菜穂と初めてデートしたときのことだ。DVDの配線をつないだことを思い出した。

「そっか・・・そうだよな」

友紀は曖昧に笑って、そのまま友達に呼ばれてそっちに行ってしまった。

後には、隼人と英二が残った。

「——なあ、佐山さんち行ったって、なんで？」

いつもより何倍もローテンションな声で英二が呟いた。この時点で、隼人は英二が怒っていることに気づき始めていた。

「・・・佐山菜穂とつきあうことにしたんだ、俺」

「はっ・・・？隼人、お前友紀のことが好きだったんじゃないの？」

「・・・それは昔の話だよ」

そう言ったとき、唐突に英二が動いて隼人は自分の胸ぐらを掴まれている。

「——っ！！」

だけど、周囲の目を気にしてかすぐに放してくれた。

「英・・・ちゃん・・・？」

「お前なんにも知らないようだから教えとくよ。今まで俺1人でお前のフォローしてきたわけじゃない。佐山さんはお前がアルトのボ

「カルだつて知ってたんだよ。だけどそんなこと言わずに黙ってお前のフォローしてきたんだ・・・」

「——えっ」

「佐山さんはずっとお前のことが好きだったんだよ。お前がアルトとして活動している間もいつも支えてたんだ・・・俺だってずっと佐山さんのことが好きだったんだ・・・」

「——っ」

「隼人なんか・・・友達じゃなけりゃよかった・・・」

どの言葉も英二は小声で話していたので、周囲には会話の内容は聞こえていなかっただろう。

隼人は足元がぐらぐらするのを感じた。

知らなかった・・・英ちゃんが言ったこと、全部・・・

改めてわかった。自分がどれだけ英二に迷惑をかけていたということが。

「はぁー・・・」

デビューするときはきつとこれからこんな生活が続いていくんだと漠然と思っていた。

しかし、現実は甘くない。

悩んでいちゃいけないことぐらいわかっている。

だけど、こたえた。英二が、友紀が。今までどんな思いで隼人と

一緒にいたのか、支えてきたのか。

・・・・・・自分はなんにもわかっていなかった。

『友達じゃなけりゃよかった』

その言葉が1番痛かった。

第14回 路上ライブ

「隼人、ちよつと休憩しよう」

試しに作ってみた曲を何度か歌っている最中、突然リーダーからそんなことを言われた。15分前に休憩したばかりだ。

「え・・なんでですか。俺まだ大丈夫ですよ」

「いいから。休めるときに休んでろ」

リーダーはすでに眼鏡をとって、パソコンで作った楽譜を持って座り込んでいる。

「休憩してる時間がもったいないです。やろう!」

そこでようやくリーダーが顔を上げた。

「今のお前は、何やったってだめだ」

そのリーダーの一言が、隼人の中の大きな石をさらに重たくした。

だめだ・・・集中できない。

1度顔を洗いにトイレに行き、その後スタジオ内をぐるぐると回っていた。

どのくらい休憩の時間があるのかわからなかったが、今メンバーの元に戻ってもまだ何も始まらないような気がしていた。

ぶーん　ぶーん

ケータイが振動する。隼人は特に相手を確認することなく電話に出た。

「もしもし」

『……おつす。今いいか?』

一瞬口から何かを吐き出すかと思った。相手は高橋英二だったのだ。

「うん。いいよ。」

『今日暇か?ちょっと用があるんだけど』

「今日——」

無意識に呟いて、今日のスケジュールを考えた。

「夜なら開いてるけど」

『よっしゃ。なら、7時に駅前のマックに集合』

「あ、うん」

『じゃっ』

英二はおそらく用件だけ伝えてさっさと電話を切ってしまった。

7時に駅前のマック……隼人は会わせる顔がなかった。

スタジオから直で駅へと向かい、マックで夕食をとった。

約束の時間にはまだ早い。そう思って時計を見ると、「遅くなった」と言っただけ向かい側の席に座る英二を見た。

「まだ20分以上あるよ」

「マジかよ。早すぎたなあ」

英二はいつもの調子で話す。友達じゃなけりゃよかったと言っていたことを隼人は思い出していたが、英二はこないだのことを特に口にすることはなかった。

「で、用って何?」

話題に困って隼人はさっそく本題を切り出す。

しばらく黙っていた英二だったが、ようやく口を開いたかと思っ
たら、

「隼人って・・・アコギ弾けるって言ってたよな？」

隼人は何を言われているのかわからなくなった。

ちなみに、隼人が弾ける楽器はギターとピアノだ。ピアノはたま
たま習っていたのだが、ギターは直人に「俺が死んだらお前がギタ
ーだぞ」と、教えられたことがあるのだ。

「少しだけど」

「アルトの曲だったら何が弾ける？」

「今弾けるのは『花びら』くらい・・・あとは楽譜がないと無理か
も」

一体英二が何をやるうとしているのかわからなかった。わからな
いままどこかに連れて行かれた。

気がつくと、人通りのある路上にて、隼人はアコギを持って立た
されていた。

「・・・はっ？」

「1曲だけでいいから。路上ライブにつきあえよ」

淡々とその準備をし始める英二。

「まずいよ。バレたら・・・」

「隼人は弾いてるだけでいいよ。あ、直人さんがハモってるとこだ
け歌ってほしいな」

アルトのハモリは基本的に直人が行つ。時々、リーダーや和馬が
参戦することもあるが、『花びら』の場合は、直人だけがハモつて
いるのだ。

「よし。準備できた」

こちらの事情なんてお構いなしに英二は立ち上がった。そして、無言でこっちを見る。

「……仕方ない。弾くだけなら大丈夫だろ……半ばあきらめてリズムをとる。もちろんアコギだけで可能な伴奏ではないが、ないよりはマシだろう。」

歌い出し。何の打ち合わせもないのに英二は完璧だった。曲の細部に渡ってまでそれは完璧に歌われている。

「すげー……英ちゃん、すげー上手いな。」

一歩後ろで聞きながら、隼人はそんな感想を持った。

最初は誰もいなかったのに、いつのまにか何人かが足を止めてこっちを見ている。

この感じは前にも感じたことがある。そうだ……仮装ライブのときだ……

「英ちゃん、俺やつぱり歌が好きだ。アルトとしてこれからもやっていきたい。」

歌の途中で英二がこっちを振り返った。ちょうど大サビに入る少し前のときだ。

英二の目が「お前も歌え」と訴えかけているのがわかった。隼人は頷いた。

後のことなんて考えていなかった。とにかく今は最後まで歌いきりたかった。

英二と2人で。大きな声で。思う存分——……

気がつく、隼人たちは拍手喝采かっさいに包まれていた。

そして・・・その中に佐山友紀の姿があることにも気がついた。

「2人ともすごいよかった・・・私感動しちゃった」

その瞳が潤むうる。友紀だけじゃない。他の何人かの人たちも目頭を押さえていたのだ。

歌で誰かを勇気づけられたらいい・・・そのとき隼人は漠然と思っ
った。

「英二君に呼ばれて来たの。こういうことだったんだね」

英二は曖昧に笑っただけだった。

「この曲は・・・」

隼人は英二を見ながら言う。

「片想いをしている人のための曲なんだよ——・・・」

自分が友紀に片想いしていたときのように・・・

第15回 双子の話

路上ライブを終えて、隼人たちはまたマックへやって来た。

「西村君がアルトだってことはライブハウスで知ったの」

今までの経緯を、友紀が淡々と語り出す。

「2年前、アルトが新しいボーカルを迎えてから、何回かライブしたことがあるでしょ？私全部見てたよ」

「そうなんだ・・・」

そのライブで歌った曲が評判になり、CMの曲に採用されたのだ。名前を出さなかったためか、世間的に注目されるようになったのが、ブレイクするきっかけになった。

「そうしたらその人と高校の入学式で会ったもん。びっくりしちやった」

「そっか、最初から知ってたんだね」

「うん・・・たぶん私が西村君を好きになったのは、アルトのボーカルだから、かしんない」

なんとなくわかっていたことなので、隼人は頷く。

「菜穂は知らないよ」

少しだけ友紀の声が低くなったように感じられた。

「アルトに興味がないから、たぶん声だけ聞いても西村君だって気がつかないと思う」

「・・・俺の口でちゃんと言うよ。クラスのみんなにも、菜穂にも」

それは隼人が1人で考えて出した結論だった。

そのとき、英二が小さな声でぼそつと呟いた。

「隼人……」

何を言おうとしているかがわかり、隼人は先に首を振ってそれを制する。

「だけど……俺」

「もういいよ。やめよう?」

まだ何か言いたそうだったが、隼人がにと笑ったことによって英二もようやく笑顔になった。

お互いにごめんは言わなかった。

昔からそうだ。ケンカしてもすぐに仲直りしてきた。今回もいつもどおりに仲直りしたかった。

そして、月日が流れた。

「よっしゃ！明日は『翼』の発売日だぞ！」

セカンドシングルの発売を明日に控え、アルトのメンバーはハイテンションでいた。

『翼』のタイアップもすでに決まっている。というか、依頼をもとにアルトが作ったと言ったほうが正しいだろうか。

アルトとしての活動は順調だった。

デビュー曲が着ったランキングベスト10に入り、アルバムも初登場1位になった。

そして、セカンドシングルの発売を記念して、すでに都内でライブを行うことが決定している。

「ライブかぁ……なんかコーフンするな！」

和馬がベース片手に言い放つ中、隼人は1人その場に立ち止まる。

「隼人？これから前祝い行かねえのか？」

「俺、ちよつと寄るトコあるんです」

隼人はそれだけ言ってぺこつと頭を下げた。

もうずいぶん前から決めていたことだ。セカンドシングルが発売される前に、自分のことを菜穂にちゃんと言おうって。

いくら好きじゃないと言っていたとしても、きつとわかってくれるだろう。

隼人はそれを信じて駆け出した。

久しぶりに菜穂に電話をかけるような気がした。
何コール目だろうか。奈穂が電話に出てくれた。
『もしもし・・・』

なんとなくその声にほつとしながら、隼人は用件を伝えようとする。

「あのさ、今からいいかな？ちよつと話があるんだけど」
『・・・やだ』

予想外の返答に、一瞬隼人は戸惑ってしまった。

「やだつて・・・なんで？」
『聞きたくない』

なんか誤解してるんじゃないだろうか。かみ合わない会話に隼人はどうしようか迷う。

「菜穂が考えてるようなことじゃないよ」

『……昨日……』

「え、何？昨日？」

『——もういいよ』

そこで電話は強制的に切れてしまった。

アルトのことを言うために電話したのに、これじゃあ意味ないじやんと思いつながら、隼人はしばらくケータイの液晶画面を見つめた。

まず真つ先に思いついたのは誕生日だった。だけど、誕生日は来月のはずだ。

別につきあつて何ヶ月の記念日とかでもないし、デートの約束をしていたわけでもない。

……じゃあ、なんなんだ？

結局、わからないままCDの発売日になってしまった。

その日は都内でライブを行うことになっている。ライブといっても、あまり大きくないイベント会場で行われるものだ。

すでに今日休む理由を先生には話してある。担任はアルトの存在も知らなくて最初は伝えるのに苦労したが、その担任により校長にまでその話は通っているそうだ。

まだクラスメートには言っていない。

それから菜穂にも……

なんだってんだよ。なに怒ってんだよ。

どうしてもわからなくて隼人は気になってしまつ。これじゃあライブに集中できない。

卑怯だとは思ったが、隼人はケータイであるところにかけてみた。

そして、その事実を知った。

『——うん。一昨日は私たちの誕生日だったけど』
双子の妹がそう答えた。

第16回 彼女が正体を知るとき

まさか彼女の誕生日を勘違いするなんて考えてもみなかった。

隼人は自己嫌悪に陥りながら、イベント会場へと戻った。すでに観客が集まってきているようだ。

覗いてみると、その数はすごかった。

「すごい！千人はいるぜー！」

マネージャーの池田がはしゃぐ。同時に直人が緊張して固まってしまった。

隼人も一瞬ぐらっとなるのを感じた。今日は平日だ。いや・・・冬休みだからか。

さすがのリーダーも緊張してきたのか、深呼吸をしている。

・・・もうすぐ出番だ。

「よしっ・・・行くか！」

リーダーの声でアルトが動き出した。

わああ・・・

歓声が沸き起こり、会場は一気にハイテンションになる。

隼人はその中で、ステージ中央に置いてあるマイクスタンドの前に立った。

同時にリーダーのドラムの音が続く。まずはアルバム収録曲から始まり、ハイな曲に会場が盛り上がっていく。

隼人は夢中で歌った。ライブパフォーマンスには慣れていないはずなのに、今はそれを知っている気がした。

デビュー曲『花びら』を歌った後、会場がなんとなくしんみりしたところで、隼人はマイクを握りなおした。

「最後の曲になりました。ところでみなさん、今日が何の日か知ってますかー!?」

集まった観客の何人かが正解を言ってくれているが、隼人は聞こえないフリをする。

「リーダーどうしょ！わかる人いない！」

いきなり話を振られたリーダーは苦笑しながら答える。

「みんな買い物帰りにちよっと立ち寄っただけなんじゃないのか？」

「ええええ……」

がつくりとうなだれると、観客から笑い声と、大きな声で、

「『翼』の発売日！」

そう聞こえてきた。それを境に口々にそんな声が聞こえてくる。

アルト4人が集まってなぜかハイタッチをする。別に打ち合わせをしていたわけではない。何かに成功したときや、安心したときに言うジンクスみたいなものだ。

「よかったー！みんな買い物帰りだったらどうしようかと思いましたがよー！」

隼人がマイクを強く握る。

「それじゃあ訊いてください。今日発売のシングル『翼』——」

会場が盛り上がる。いつのまにかアルトと観客はさらに近くなっていた。

それは突然起こった。

最初のサビを歌い終えようとしているときだ。調子に乗ってステ
ージのギリギリまで来ていたことは認める。

だけど、まさかその数秒後にそんなことが起こるなんて考えてい
なかった。

「——隼人！」

最後に誰かの声が聞こえた気がした。

その日、佐山菜穂は家で夕食のカレーライスを作っていた。

「うん、おいしい」

隣でつまみ食いをした母がにつこりと笑って言う。

「これならいつでも嫁に行けるわね」

その冗談に、菜穂は答えられなかった。ただ聞こえないフリをし
て黙々とカレーをかき混ぜる。

誕生日を忘れられたことで怒るなんて自分も小さい人間だと思う。
だけど、ショックだった。お互いに誕生日は知っていたはずなの
に。

そもそも最近是一緒に会うことも少なくなってしまった。

何かバイトをやっていると言っていたが、一緒に帰ることもでき
ないくらい忙しいバイトなのだろうか。

隼人はそのことについて何も話してくれなかった。

「西村君とはいつ出会ったの？」

母がにやにやとしながら訊ねてきた。菜穂は苦い顔をする。

「もー今忙しいんだからー・・・」

「ちえーっ」

あきらめた母はリビングに向かう。テレビの音が聞こえてきたのでたぶん点けたのだろう。

隼人と出会ったのは、入学式の時だ。向こうは覚えていないようだったが、菜穂はちゃんと覚えている。間違えて自分の席に座っていた男子生徒の顔を。

最初の印象は覚えていない。別に一目惚れではなかったのは覚えている。

ただ、間違えたとわかった後のその表情が面白かった。

頼りなくうつろたえるその姿は、なんだか情けなくてどうしようもなかった。

たったそれだけだった。

クラスも同じになったことはなかったので、話す機会は1度もない。2年生になって友紀が隼人と同じクラスになって、正直すごくうらやましかった。

いつのまにかずいぶん彼を意識していたらしい。

まさかライブハウスで女子トイレにいるなんて思わなかったが、そのときもやつぱりすぐくろろたえて逃げていった。

菜穂は知っていた。あんな情けなくてどうしようもない人が変態ではないということ。

「菜穂・・・ちよつと!」

リビングから声が聞こえ、火を止めて母の元へと向かう。

「なーに?」

「これ・・・西村君じゃないの!？」

一体母が何を言っているのかわからなかった。ただ、夕方のニュースを見ていることはなんとなくわかった。

それは今日起こったニュースのようだった。

『——人気グループ『アルト』のボーカルの隼人さんが、今日行われたイベントの最中、観客席から足を引っ張られて落下。意識不明の重体です』

・・・・・・何これ・・・・・・？

『熱狂的なファンによる犯行——』

もうニュースキャスターの声は入ってこなかった。

ただ、自分の知っている人が歌っている映像をぼんやりと見ていた。

——隼人？

第17回 病院にて

「……なーにが意識不明の重体だよ。お前なあ、こういうときは感動的な言葉の1つでも吐いてピーってなるんだよ」

「そんな縁起でもないこと言わんといってくださいよ」

都内の大学病院。その一室の個室で、お見舞いのみかんを食べながら1人の入院患者が深くため息をつく。

「とにかく良かった。検査結果はもう出たんだろ？」

「異常ないみたいっす。明日にでも退院できるだろうって医者が……あの、リーダー」

隼人は上目遣いに目の前の人を見る。

「ん？どうした？」

「すいませんでした……俺のせいでせつかくのライブが……」

「お前のせいじゃないだろ。もう犯人も見つかったことだし、隼人は早く怪我を治すことだけ考えてればいいよ」

リーダーはぽんぽんと頭を叩いてくる。傷に影響がないようにすごく軽い力だった。

——2日前……

イベントの最中、隼人は誰かによって足を引つ張られてしまった。観客の1人がすごく身を乗り出してきたのを見た瞬間の出来事だった。

その後、バランスを崩して、ステージから転落。打ちどころが悪くて気を失ったのだ。

和馬の話によると、自分は結構な量の血を流していたようだ。会場は一時騒然となり、隼人は気絶している間にいろいろなこと

が過ぎていった。

重体と言われながらも、その日の夜に当の本人はあっさりと目を覚ました。

「なんかCDもすげー売れてるみたいでさ、昨日のオリコンチャート1位だつて」

直人が軽く笑いながら言う。

「すげー！隼人が体を張って出した結果だな。お前の苦労は無駄にはしないぜ」

「なんか俺が死んだみたいじゃないですか」

だんだん和馬のノリについていけなくなるのを感じた。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

リーダーが立ち上がったので、隼人も見送ろうとベッドから出ようとしたとき、

「いいからいいから。怪我人はおとなしく寝てろ」

和馬によって強引に寝かされてしまった。

「お大事に」

「はい。ありがとうございました」

メンバーが出て行くと、急に病室は静かになってしまった。

安静にしてるとは言われたが、隼人は電源の切ったケータイを握り締め、病院の外に出てみた。

メールを問い合わせてみると、案の定、すごい数のメールが届いていたようだ。

隼人はその中からある人のメールを探していた。

・・・ないか。

液晶画面をぼんやりと見つめていたとき、それにぽつと何かが落ちた。――雨だ。

しかし、隼人は中に入ろうとはせず、ただじつとそこにたたずんでいた。

雨が強くなっていく。

ようやく中に入ろうとケータイを閉じたそのときだった。

「濡れちゃうよ」

その声にはっとして隼人は振り返った。

コツコツというブーツの音が鳴り響き、白い傘をさして歩いてくる少女がいた。

「・・・菜穂・・・」

雨のノイズが強くなっていく。

病室に入るまで、菜穂は一言も喋ろうとはしなかった。

覚悟はしていたが、いざこのときが来ると緊張してしまう。とにかく落ち着こうと隼人は深呼吸をした。

・・・よしっ！

「菜穂・・・あのさ！」

そう言いかけたときだ。奈穂が涙ぐんだ顔でこつちを見ているのがわかった。そして、ゆっくりと歩いてきて隼人の包帯に触れた。

「・・・心配したんだから」

赤くなつた瞳にまっすぐに見つめられ、隼人はうろたえてしまった。

「ごめん・・・テレビで知った？」

「——うん」

「ごめん・・・」

それしか言えなかった。

隼人は全部話した。中学3年生のときにアルトに入ったことから、こないだステージから落ちたときのことまで全てを。

菜穂はそれを黙って聴いてくれた。時々相槌をうつてくれたが、ほとんど隼人が1人で喋り続けた。

「——ずっと黙っててごめん」

「・・・私がアルトに興味がないから言わなかったんだよね」
肯定も否定もしなかった。

「・・・西村君が今別れたいって思ってるのなら・・・フラれる覚悟はできてるよ」

別れたくない・・・って言いたかった。だけど、それを菜穂自身に言われてしまつてとてもショックだった。

「別れねえよ・・・誕生日1ヶ月間違えたけど、それでも菜穂の彼氏でいたいよ・・・」

その言葉に、対する奈穂は驚いた表情をしていたが、すぐに顔を赤くして俯いた。

一瞬隼人はうろたえたが、その後の奈穂の言葉に苦笑してしまつた。

「まあ・・・アルトのボーカルが彼氏でもいつか！」

「うわー・・・さっすが菜穂ちゃん、言うねえ」

互いの唇が重なったのは、それからすぐだった。

第17回 病院にて（後書き）

次回最終回です。

最終回 アルト（前書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
書ききれなかった無駄な設定を書きました。
そこも読んでくださると嬉しいです。

最終回 アルト

退院してから初めて学校に行ったときのクラスメートの反応はそれぞれだった。

最初は驚かれた。なんで言わなかったんだと責められたり、怪我を心配されたり、そもそもアルトって何？と訊かれたり、とにかく反応は様々だった。

その日だけで、隼人は動物園のレッサーパンダの気分になった。

「もう怪我のほうは大丈夫なのか？」

ようやく解放されたとき、英二が苦笑しながら話しかけてきた。隼人も苦笑いになる。

「ああ。それよりいろいろ迷惑かけたな」

「ほんとだよ。バレたらバレたであっさり英雄だな」

一宮に言われたクラスメートにも正体を明かすなという約束は守れなくなったが、これで良かったんだと思う。うしろめたさを感じることなくみんなと接することができるから。

ただ、レッサーパンダからは早く脱出したかった。

隼人の大事を取ってからなのか、マネージャーの池田は先1週間全く仕事を入れていなかった。

だから、菜穂といっぱい遊びに行こうと考えている。

「英ちゃん、俺今からデートしてくらあ」

「いつてらっしゃい。俺もだけどな」

なんとなくわかっていた。英二が友紀とつきあいだしたということ。

よかった・・・ほんとよかった。隼人は心からそう思った。

いつもより遠回りして帰った。自転車を引いて歩き、隣には奈穂がいる。

「アルトってどういう意味なの？」

会話の流れで菜穂にそう訊かれてしまって、隼人はたつと固まっ
つてしまった。

「え・・・なんだろ」

「えええ・・・知らないのー？」

そういえば前にメンバーが言っていたような気がするが、すっかり忘れてしまった。

「なんだったつけ・・・歌のパートとは関係なかったような気がするけど・・・」

ソプラノ・アルトとは関係ないんだと思ったことは覚えている。

しかし、肝心なところを忘れてしまったらしい。

「そうだ、本屋に寄ってつてもいい？」

菜穂の提案で、2人は駅前の書店に寄ることにした。

書店に入ってから、隼人はグループ名の由来を思い出そうと奮闘していた。自分がバカなのはわかっていたが、こんな肝心なことまで思い出せないとは思わなかった。

「まだ思い出せないの？」

呆れたような表情で奈穂がやって来る。

「やばいよな、俺。なんか思い出せそうな気はするんだけど」

ふとそのとき、隼人の視界に英和辞典が映った。

そうだ・・・もしかしたら外国の言葉かもしれない・・・

「イタリア語？」

真っ先にその辞書を手に取った隼人を見て、不審そうに奈穂が訊ねてくる。

「うん。リーダーが昔イタリア語勉強してたから」

ぱらぱらとページをめくって捜し始めてからすぐそれを見つけることができた。

「——あつた」

——Alto>アルト<

高所 上部 天 海

そうだ。結成するときにリーダーが言ってた。どんなことがあつても、俺たちは上だけを見ていこうって・・・

一見すると、アルトは低いイメージがあるが、あえてイタリア語の意味で使ったところがリーダーらしかった。

菜穂にそれを教えると、へー・・・かつこいいと感心してくれた。

「いつか菜穂にもアルトが好きだって言わせてやるよ」

隼人はアルトのボーカルとして言った。

アルトが初のライブを行うことになったのは、隼人が高校を卒業した後の話になる。

「はー・・・緊張するー」

直人がステージ裏でそんなことを言いながら何かとなえている。

「俺もだ。今日初めて彼女が来ることになってんだよ」

珍しく和馬も緊張しているらしい。

「よっしゃ！集まってくれ」

リーダーはすでに円陣の準備をしている。

全員揃ったところで、リーダーが一言言った。

「とにかく楽しくやろう！！」

「おおおおっす！！！！」

なんとも変なかけ声でアルトの初のライブが開始される。
隼人はステージ上のマイクスタンドに向かって走り出した。

最終回 アルト（後書き）

なんとなく書かなかった無意味な設定です。

・実はリーダーは結婚している！

奥さんは1度だけ作中に登場していますが、

それらしい描写は一切書いていません；

わかったらそれとなく教えてくれたら嬉しいです。

・直人の昔の彼女・・・の話がありました、そんな感動的な話ではないです。

ただこっぴどくふられただけです。

・和馬はちゃんと彼女と復活することができた。

・アルトの変動。メンバーが変わる予定でいたんですが、それを書くことはできませんでした・・・

また機会があつたら書かせてください！

ここまでありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8139f/>

アルト

2010年10月9日03時22分発行